

発掘調査報告第11集

駒ヶ根市東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業（昭和56年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 古宮遺跡

1982

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

## 序 文

今回ここに刊行の運びとなった報告書は、県営ほ場整備事業に伴い、昭和56年に実施された埋蔵文化財の発掘調査の報告であります。

本遺跡において、駒ヶ根市では、県営ほ場整備に先立ち、昭和55年秋に試掘を実施し当初の遺跡範囲を再検討しました。その結果、遺跡の中心がもっと南に位置するのではないかという推察を行いました。

このたびの発掘調査により、本遺跡から出土した遺構・遺物は極めて少なく、それほどの成果を挙げたとは言及しがたいですが、今後の研究の一資料として把握できると考えます。

長期間にわたって発掘調査をご指導下さった友野良一団長をはじめ、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただいた下間地区土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚志により無事初期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和57年3月25日

駒ヶ根市教育長 木下 衛

## 凡 例

- 1 今回の調査は昭和56年度に実施したもので、駒ヶ根市東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業に伴うものである。
- 2 事業は南信土地改良事務所の委託により、県営ほ場整備事業駒ヶ根下間地区埋蔵文化財調査会が実施したものである。
- 3 調査は、昭和56年7月24日から8月11日までの17日間行われ、出土品の整備作業は、昭和56年8月12日から15日までの4日間行われた。
- 4 遺構・遺物関係の図面・実測・拓影・写真は、小原晃一があたった。
- 5 本報告書の執筆は、小原晃一があたった。
- 6 図面の縮尺は、その都度指示してある。
- 7 遺物及び実測図類は、市立駒ヶ根博物館に保管してある。

# 目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
図版目次	
<b>第 I 章 発掘調査の経緯</b>	1
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	1 · 2
第 3 節 発掘作業経過	2 · 5 · 6
<b>第 II 章 遺跡の環境</b>	6
第 1 節 位置及び地形	6 · 8
第 2 節 歴史的環境	8 · 9
<b>第 III 章 発掘調査</b>	10
第 1 節 調査概要	10 · 13
第 2 節 遺構	13
第 3 節 遺物	14 · 19 · 21
<b>第 IV 章 まとめ</b>	21

# 挿 図 目 次

第 1 図 古宮遺跡位置図	3
第 2 図 古宮遺跡地形図	4
第 3 図 古宮遺跡周辺遺跡分布図	7
第 4 図 昭和55年試掘調査実施位置図	11
第 5 図 古宮遺跡グリット図	12
第 6 図 調査 1 区 W-E 1 ~ 5、S-N 1 · 2 層位断面図	15
第 7 図 磨群実測図	17
第 8 図 調査 1 区 A · C · D · E グリット出土遺物実測図	18
第 9 図 調査 1 区 F · G グリット出土遺物実測図	19
第10図 調査 2 区 3 ~ 5 · 8 · 12 グリット出土遺物実測図	20

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景.....	25
図版 2	調査 1 区 A～E グリット.....	26
図版 3	調査 1 区 F～K グリット.....	27
図版 4	調査 1 区 A・C・D・E (上段) F・G (下段) グリット出土遺物.....	28
図版 5	調査 2 区近景及びグリット (No. 1・2・4・11) .....	29
図版 6	調査 2 区 No. 3～5・8・12 グリット出土遺物.....	30

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市中沢永見山に位置する古宮遺跡が駒ヶ根市東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業の一部に入るとのことで、昭和55年9月10日に、長野県教育委員会、南信土地改良事務所、駒ヶ根市教育委員会の出席のもとで、現地協議をした結果記録保存を行うということで、駒ヶ根市が担当して発掘調査を行うこととなった。

発掘調査に先立ち、昭和55年10月21日～24日までの4日間、古宮遺跡の遺跡範囲確認の為、9ヶ所のグリットを設定し試掘調査を実施した。この結果、当初遺跡地の主体と考えられていた場所には遺物包含層がなく、南西方向位に遺物包含層の確認をみた。（第13図参照）

昭和56年5月に、南信土地改良事務所から発掘調査の依頼があり、5月25日に南信土地改良事務所長と市長との間に委託契約を結び、つづいて市長と遺跡調査会会长との間に再委託契約を締結した。調査は県営ほ場整備事業駒ヶ根下間地区埋蔵文化財調査会が行うこととし、調査団を編成し、団長には友野良一氏をお願いし、調査の準備に入った。

現地には休耕田の作物があり、その収穫を待って7月24日から行うこととなった。

## 第2節 調査会の組織

### ● 県営ほ場整備事業駒ヶ根下間地区埋蔵文化財調査会

会長	木下 衛（駒ヶ根市教育長）
理事	小池 金義（〃 教育次長）
"	宮脇 冒三（〃 文化財審議委員）
"	松村 義也（〃 〃 ）
"	竹村 進（〃 〃 ）
"	増沢 広人（市立駒ヶ根博物館長）
監事	中原 正純（市文化財保存会会长）
"	北原 名田造（駒ヶ根郷土研究会会长）
幹事	北沢 吉三（市教育委員会社会教育係長）
"	原 寛恒（〃 社会教育係）
"	福沢 房美（市立駒ヶ根博物館）
"	小原 晃一（〃 ）

### ●調査団

団長 友野 良一（日本考古学協会会員）<発掘担当者>  
調査員 小原 晃一（長野県考古学会会員・市博物館）<発掘担当者>  
〃 小町谷 元  
調査補助員 小河 千折（長野大学生）  
〃 久保田 茂明  
指導者 関 考一（長野県教育委員会指導主事）  
白田 武正（〃）  
郷道 哲章（〃）  
樋口 昇一（〃 専門主事）  
岩佐 今朝人（〃）  
 笹沢 浩（〃）  
小林 秀夫（〃）  
青沼 博之（〃）  
小柳 義男（〃）  
百瀬 新治（〃）  
土屋 積（〃）  
百瀬 長秀（〃）  
林 茂樹（日本考古学協会会員）（順不同）

## 第3節 発掘作業経過

### ●発掘作業日誌

7月24日（金） 現場にて発掘作業の打ち合せを行う。10m×10mの主グイを打ち、その間に2m×2mのグリットを設けた。調査区を下段の田と上段の田に2ヶ所設定し、前者を調査1区、後者を調査2区とした。調査1区周辺の草刈りを行う一方、表土の掘り下げを開始。調査1区では、A～Kのグリットを設定する。

7月25日（土） 調査1区A・Bグリットの表土掘り下げ作業。

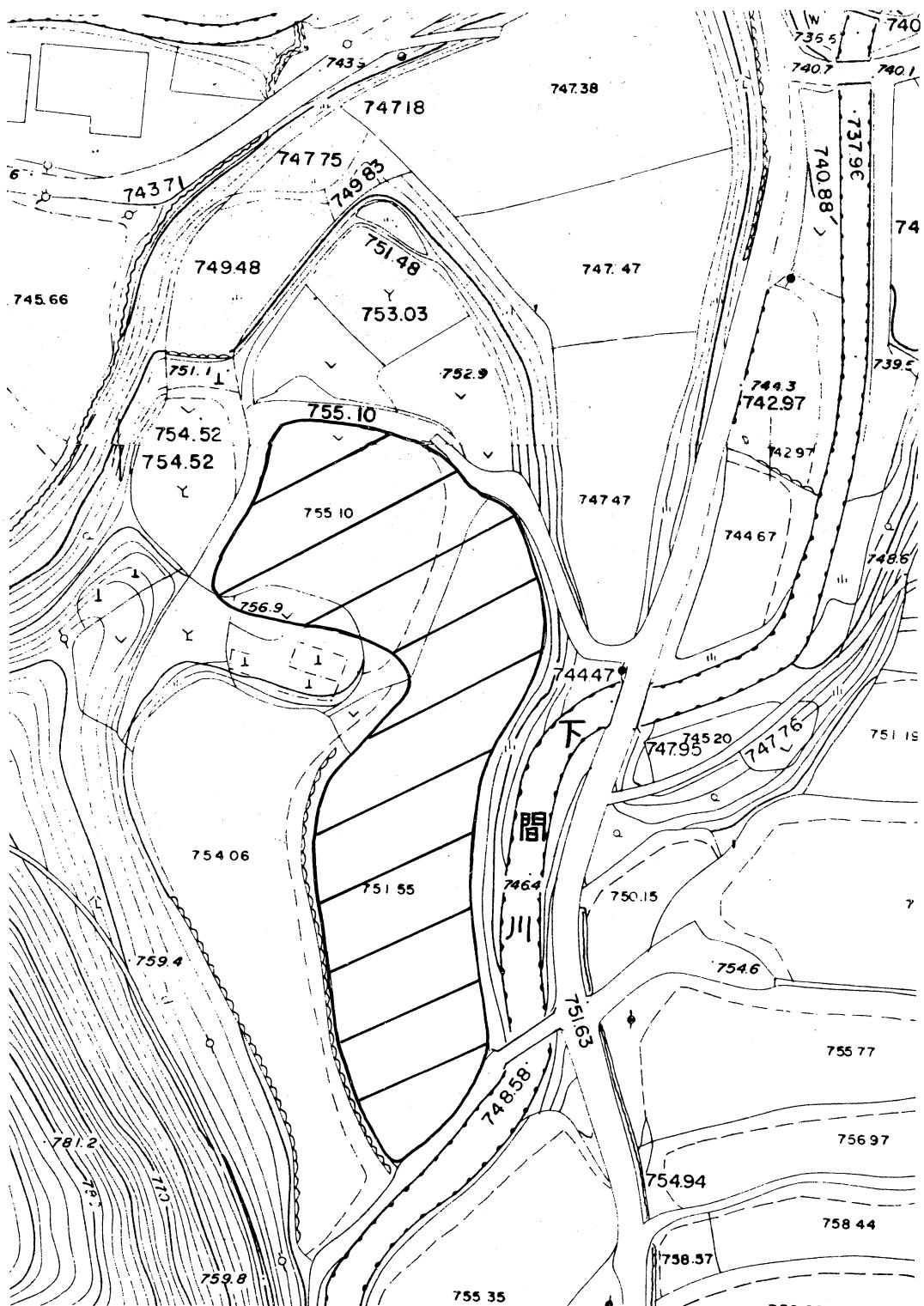
7月26日（日） 調査2区グリット設定。12グリットを設ける。発掘作業はせず。

7月27日（月） 調査1区A・Bグリットの表土掘り下げ作業。地場（埋土）は薄く東へ傾斜しながら、茶褐色土と大きな礫が堆積していて、作業がやりにくい。

7月28日（火） Aグリットの排土作業完了。出土遺物は茶褐色土層中より陶器片が2点出土。Bグリットも礫が多く、CグリットをC'グリットとして排土をやめ、Aグリットの北側をCグリットとして表土掘り下げ開始。



第1図 古宮遺跡位置図 ( $S = \frac{1}{200,000}$ )



第2図 古宮遺跡地形図 ( $S = \frac{1}{2,000}$ )

7月29日（水） Bグリット掘り下げ完了。出土遺物はない。Cグリットの掘り下げ半ば終了。Dグリットの掘り下げ作業開始。

7月30日（木） Cグリット排土作業完了。基盤には礫が少ない。出土遺物は暗茶褐色土層中より内耳土器片、チャート、鉄製品が出土。D・E・I・Jグリットの掘り下げ開始。調査1区は、現在までの調査状態により、礫が非常に多く下間川の氾濫原であったと思われる。

7月31日（金） Dグリット排土作業完了。基盤には礫がやや多い。出土遺物は、陶器底部片と鉄製品が出土。A～Dグリット基盤には落ち込みは確認されない。Eグリットの掘り下げ半ば終了。他のグリット同様に礫が多く、みそ土が地場として埋められている。断面には、砂層が混じっている。

8月1日（土） Eグリット排土作業完了。基盤には礫が多い。出土遺物は暗茶褐色土層中より石鏃1点出土。Iグリットには礫が少なく、基盤も良好かと思われる。

8月3日（月） Iグリット排土作業完了。基盤には礫がなくソフトロームが堆積しているものの遺構が確認できない。出土遺物はない。Jグリットの掘り下げ半ば終了。礫は少ない。Fグリット掘り下げ開始。

8月4日（火） F・Jグリットとともに排土作業完了。Fグリットの基盤には礫も少なく、良好であるが遺構らしき落ち込みは確認できない。出土遺物は暗茶褐色土層中より内耳土器片と陶器片が数点ずつ出土。Jグリットも基盤は良好であるが、礫が少しある。出土遺物はない。G・Kグリットの掘り下げを開始し、Gグリットの排土作業完了。基盤に礫が割とあり、遺構は確認できない。出土遺物は、暗茶褐色土層中より黒曜石片、須恵器片、陶器片、内耳土器片が各1点ずつ出土。

8月5日（水） H・Kグリットの排土作業完了。H・Kグリットとともに基盤に礫が多く、遺構はないが、EとHグリット東端部に、旧下間川の川端であったと考えられる石積が発見された。埋土のみそ土も厚い。出土遺物はない。S-NセクションNo.1・2とW-EセクションNo.1・2の実測と写真撮影を行う。

8月6日（木） 調査1区のW-EセクションNo.3～5の実測と写真撮影を行う。

調査2区へ調査を移す。No.11・12グリットを掘り下げ、完了。深さ15cm前後で、基盤はみそ土である。No.11・12グリットとともに遺構は確認されず、出土遺物はNo.12グリットより陶器片が1点出土。

8月7日（金） 調査2区No.8・9・10グリットを掘り下げ、完了。深さは、8・9・10ともに15～20cmの深さで、遺物包含層や落ち込みはない。No.8グリットの表土中より陶器片が1点出土。

8月8日（土） No.4・5～7グリットを掘り下げ、完了。No.4グリットは、深さ1m20cmある。No.5～7グリットは深さ80cm前後である。No.4グリットの表土より内耳土器片が1点、黒曜石片が3点、縄文土器数点、No.5グリットより陶器片が2点出土。No.6・7グリットより出土遺物はなかった。No.4～7グリットの基盤には遺構確認されず。

8月9日（日） No.3 グリットを掘り下げ、完了。深さは1m30cmあり、基盤には落ち込みはない。出土遺物は、暗茶褐色土層中より縄文土器数点と内耳土器片3点が出土。

8月10日（月） No.2 グリットを掘り下げ、完了。深さは1m40cmあった。No.4 グリットから3・2 グリットへかけて徐々に深くなっている。出土遺物はなく、遺構も確認できず。

8月11日（火） No.1 グリットを掘り下げ、完了。深さは1m40cmあり、基盤に近い層は黒色土であった。出土遺物はなく、遺構も確認できず。調査2区の写真撮影を行う。12ヶ所のグリットを掘り上げたが、遺物も少なく、遺構も確認できないので、拡張して調査を行うことを中止して、作業を終了した。

## 第 II 章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形（第1図・2図）

当遺跡は、駒ヶ根市中沢永見山1524-1番地に位置する。国鉄飯田線伊那福岡駅より東10kmに位置し、中沢中割永見山入口より南へ3kmの地点である。標高は、751m前後である。

伊那谷は、長野県の南部にあり、駒ヶ根市は上伊那に属しほぼその中程に位置する。東に赤石山脈、中央構造線をはさんで戸倉山・高鳥谷山・陣馬形山をはじめとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には、北の将棋頭山から南の恵那山まで60数kmにおよぶ木曽山脈がある。その間には、諏訪湖に端を発して静岡駿河湾に至る天竜川が南下している。

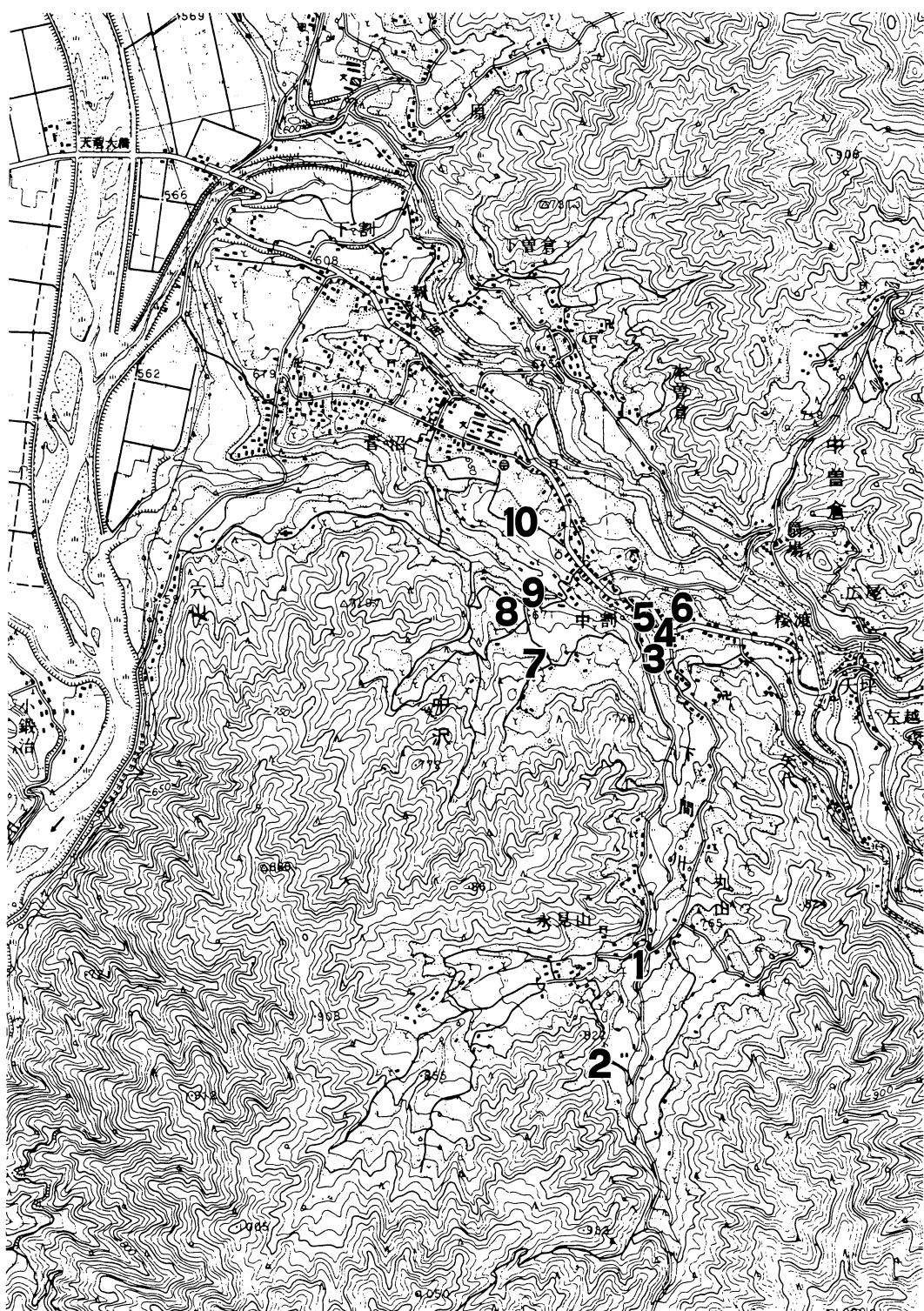
駒ヶ根市は大きく分けて、四つの河川の造り出した扇状地により形成されている。天竜川をはさんで、西には、木曽山脈の主峰駒ヶ岳の南、宝剣岳より流れ出でる太田切川、空木岳より流れ出でる中田切川が造り出した扇状地と、東には、伊那山脈の高鳥谷山より流れ出でる塩田川、分杭峠と折草峠より流れ出でる新宮川が造り出した扇状地により形成される。

駒ヶ根地区に遺存する遺跡は、それらの大河川とその支流となる小河川の沿岸にほとんどが分布している。

当遺跡は、前期の新宮川の南に位置し、その川が造り出した扇状地に流れ込み、天竜川の一支流となる、陣馬形山に端を発する下間川のほぼ中央地点に位置する。下間川の左岸段丘上に存在する当遺跡は、西裏に山をひかえ、下間川との比高差3mを測る。下間川を臨む小テラスに遺跡が存在すると言える。

当遺跡は、この下間川が氾濫した時に形成された地形で、基盤にはローム層が堆積するものの、その上部には、直径1mにも及び岩石や礫層が堆積している。この岩石や礫層は、下間川床にまで及ぶものであり、遺構は直接構築されなかったものと考える。

当遺跡の層位について簡単にふれると、現況がかなり傾斜の強い地形面に水田が造られたため、ノーマルな土層の堆積は見られない。



1.古宮 2.よきとぎ 3.門前 4.的場 5.高見城跡 6.上垣外 7.羽前場 8.小山 9.下間 10.高見原  
第3図 古宮遺跡周辺遺跡分布図 ( $S = \frac{1}{25,000}$ )

耕作土（表土）を第Ⅰ層として、以下に示すとおりである。

第Ⅰ層——耕作土（表土）

第Ⅱ層——地場

第Ⅲ層——埋土（旧地場を含む）

第Ⅳ層——暗茶褐色土

第Ⅴ層——褐色土

第Ⅵ層——砂層

第Ⅶ層——礫層

第Ⅷ層——ローム層

このような層位関係がみられるが、遺跡地の東半分が下間川の氾濫原となっていたためと開田時の状態により第Ⅲ層—埋土が複雑に堆積している。

## 第2節 歴史的環境

古宮遺跡が所在する駒ヶ根市中沢地区は、古くから遺跡分布の調査がされてきたものの、正式な調査は少なくその具体的な内容は明らかになってはいない。

駒ヶ根市全域では今までに170ヶ所にも及ぶ古代から歴史時代にかけての遺跡が確認され、当中沢地区には、その五分の一弱の31ヶ所が存在している。

中沢地区の初源的な調査は、大正15年に発行された鳥居龍藏博士の著による『先史及原始時代の上伊那』の中に収められている。第3図中の7、羽前場、9、下間、10、高見原の各遺跡が調査遺跡に相当するものと考えられる。

では、まず古宮遺跡周辺の遺跡について簡単にふれておきたい。（第3図参照）

1. 古宮遺跡 今回の調査遺跡であり、昭和31年発行の『信濃史料 第一卷上』遺跡地名表によると「溝ノ口」遺跡とされ、「台地（繩）石鏃・打石斧」と記されている。その後、昭和54年に実施された中沢地区埋蔵文化財包蔵地概要調査により「古宮遺跡」と改名される。下間川の左岸段丘上に位置する。概要調査により遺跡地の開田時の破壊が進んでいると考察されている。標高は751m前後である。

2. よきとぎ遺跡 古宮遺跡と同じ下間川左岸段丘上に位置する。古宮遺跡の南方500mの地点で、字名は飼古（ケイゴ）と呼ばれる。遺跡面積はそれほど広くなく、古くから縄文時代の遺跡として注目されている。最近の試掘調査及び昭和56年度の発掘調査により、縄文時代早期末から前期にかけての遺物・遺構を中心に、縄文時代中期・後期、奈良から平安時代、さらに鎌倉から以降の遺物が発見されている。標高は780m前後である。

3. 門前遺跡 下間川の右岸段丘上に位置する。的場遺跡とともに縄文時代後期の遺跡として知られる。正式な調査は今までに行なわれていない。高見城跡の同一台地上にある。下間川に向って西側が崖の如く急傾斜である。標高は686m前後である。

4. 的場遺跡 下間川の右岸段丘上に位置する。門前遺跡を包括する遺跡で、縄文時代後期の遺跡として知られる。遺跡地の北側は高見城の外郭に当っている。標高は690m前後である。

5. 高見城跡 下間川の右岸段丘上に位置する。昭和55年度に城郭の測量調査が行われている。中沢中割にあり、城に付随して町割が行われ城下町を形成している。南西側は、下間川が自然の要害となっている。現在、本丸と登城（外城）の間の濠は永見山方面への道路に利用されている。文明19年（1487年）の神長官満実書留などの資料がある。中世城郭の研究の上には重要な城跡である。標高は、685m前後である。

6. 上垣外遺跡 下間川と新宮川にはさまれた台地上に位置し、高見城の東方200mの地点にある。縄文時代の遺跡とされている。標高は、686m前後である。

7. 羽前場遺跡 下間川の左岸段丘上に位置する。正式な調査は行なわれておらず、昭和30年代の調査によると、縄文時代の打石斧と石錘が出土している。標高は、680m前後である。

8. 小山遺跡 下間川の左岸段丘上に位置する。縄文時代の遺跡として大正時代から知られている。以後、正式な調査はされていない。標高は、660m前後である。

9. 下間遺跡 下間川の右岸段丘上に位置する。小山遺跡の対岸にあり、小テラスに遺跡が形成される。標高は、660m前後であり、縄文時代の遺跡である。

10. 高見原遺跡 中沢地区における最大級の遺跡で、遺跡面積はほぼ100.000m<sup>2</sup>に及び、縄文早期から中期初頭・中葉にかけての遺物が多数出土している。ほぼ東西に長い台地上全体に遺跡の広がりを見せ、下間川に臨む斜面にも及ぶ。当遺跡の一部—西側台地先端部分ーにおいて、昭和50年と54年に発掘調査が実施され、縄文時代中期初頭の住居址3軒と小堅穴が16基、土塙が109基が確認され、縄文時代前期末から中期初頭の集落研究に重要な役割をもつ。

このように、古宮遺跡の周辺の遺跡については、未調査や資料の不足により総合的なことは明確となり得ていない現情である。しかし、多くの関係者が語られているように、陣馬形山に端を発する下間川沿岸には立地条件—とりわけ急斜面の土地が多い—の悪さに劣らず、多くの遺跡が存在している（未調査や未確認の為、早い調査が必要）ことは、重要視する必要がある。

## 第 III 章 発掘調査

### 第1節 調査概要

前章第1節で述べたとおり、本発掘調査に先立って昭和55年10月21日～24日までの4日間、遺跡範囲確認のため、9ヶ所のグリットを設定し試掘調査を実施した。(第4図参照)

本調査の記述の前に、上記の試掘調査の内容を記しておきたい。

第4図中の試掘坑1～9までの外に一応坑を設定したが、排土の状況により9ヶ所となった。

試掘坑1は、第I層表土(耕作土)が黒褐色を呈し深さ22cm、第II層が黄褐色を呈し67cm、第III層が淡褐色を呈しかなり深く基盤となるローム土は確認できなかった。遺物包含層はない。

試掘坑2は、第I層表土が黒褐色を呈し深さ21cm、第II層が黄褐色を呈し79cm、第III層以下は試掘坑1と同じ。遺物包含層はない。

試掘坑3は、第I層が黒褐色を呈し深さ15cm、第II層が黄褐色を呈し78cm、第III層以下は試掘坑1と同じ。遺物包含層はない。

試掘坑4は、第I層が褐色を呈し深さ24cm、第II層が第I層褐色土と「味噌土」との攪乱土で深さ52cm、第III層には、ローム腐乱土が5cm堆積し、第IV層ロームと続く。遺物包含層はない。

試掘坑5は、第I層が褐色を呈し深さ15cm、第II層が「味噌土」で深さ40cm以下まで続く。ローム層は確認できず。遺物包含層はない。

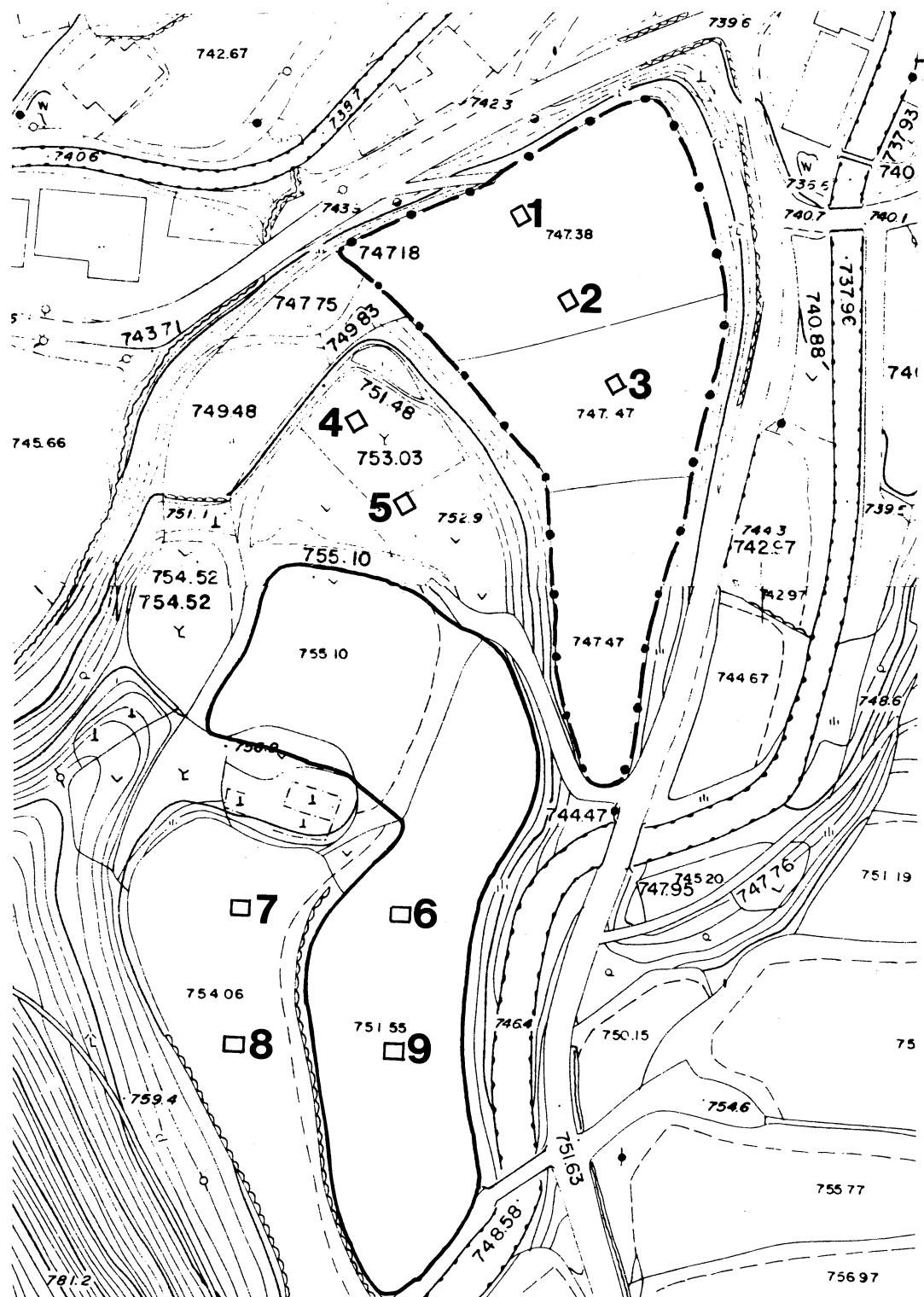
試掘坑6は、第I層が褐色を呈し深さ22cm、第II層が灰褐色を呈し深さ48cm、第III層が暗茶褐色を呈し深さ32cm、第IV層がローム腐乱土で深さ8cm、第V層がローム層と続く。出土遺物はないが、第III層暗茶褐色土に遺物を含む可能性が考えられる。

試掘坑7は、第I層が褐色を呈し深さ20cm、第II層が黄褐色(第二次堆積のローム土)を呈し深さ97cm、第III層が暗茶褐色を呈し礫を多く含み深さ72cm以下に及ぶ。ローム層確認できず。出土遺物はない。

試掘坑8は、第I層が褐色を呈し深さ20cm、第II層が黒色を呈し深さ12cm、第III層が暗茶褐色を呈し深さ52cmで、以下確認せず。第III層には多量の礫を含む。出土遺物はない。

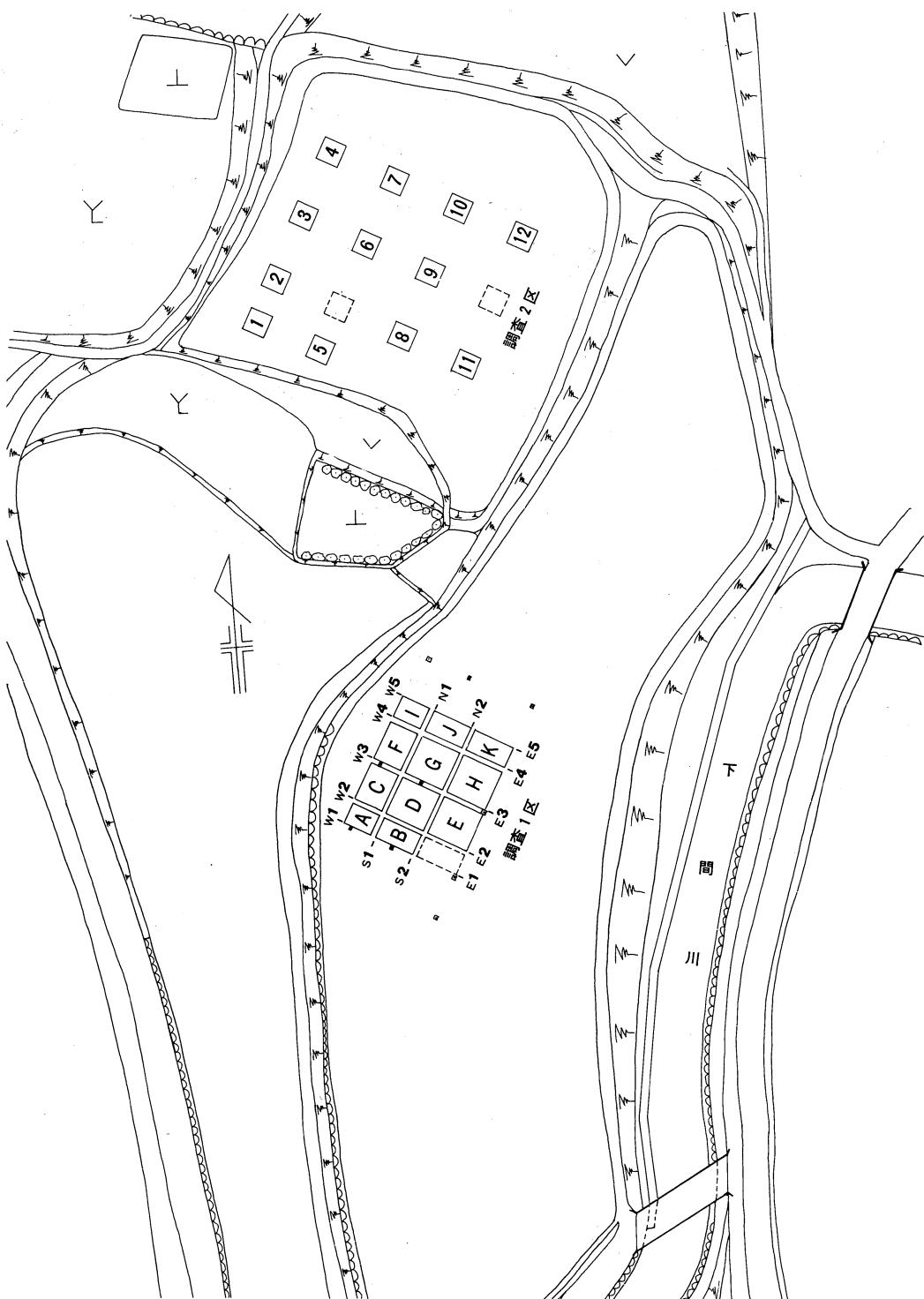
試掘坑9は、第I層が褐色を呈し深さ22cm、第II層以下は礫層のため掘り下げできず。出土遺物はない。

以上の試掘の結果から、試掘坑1～5の周辺には遺物包含層が確認されず、出土遺物及び表採遺物もないため本調査対象区域から外することを考えた。試掘坑6～9においては、6が良好な堆積状態を示す外は、7が2mの深さをもってもロームが確認されず、開田時の客土の状態を推測し、基盤が6のレベルと同一位になるとして再検討を本調査時の状態にゆだねた。8・9については礫層が確認されたため、遺物包含層がないという推測を立て、本調査の対象区域から外すことに予定した。



(註) (○)内は当初考えられていた遺跡範囲 (□)内は今回の発掘調査区域

第4図 昭和55年試掘調査実施位置図 ( $S = \frac{1}{1,000}$ )



第5図 古宮遺跡グリット図 ( $S = \frac{1}{600}$ )

さらに、試掘坑5と7の間の田には、休耕転作用の麦が作られていたため、本調査時の排土作業に調査をやだねた。

以上のような試掘結果をふまえて、本調査では、試掘坑6を中心として、試掘坑5と7の間の地区を調査することにし、前者を調査1区、後者を調査2区とした。(第5図参照)

調査1区は、試掘坑6を掘った付近の西側の土手寄りを基点として10m×10mの主グイをほぼ南北に延ばして打ち、4m×4mのグリットを設定しA～Lとグリット名をつけた。が、調査途中で、Cグリットに表土下より礫が確認され排土作業が不可能なため、CグリットをC'グリットとし、D～Lグリット名を、C～Kグリットのように1つ繰り上げ、Lグリットを外した。

A～Kグリットを掘り下げ、遺構・遺物の確認をもってI～Kグリット北側へ拡張する計画であったが、遺物を含むが遺構なしとの判断をもって調査1区の調査を打ち切り、礫群実測・層位実測・写真撮影を行い、調査2区へ移った。

調査2区は、グリット方式で、No.1～12まで排土作業を行った。前述の調査作業日誌にあるように、No.8～12グリットは深さ15～20cmで第II層となり「味噌土」であり遺物は8・12グリットよりそれぞれ陶器片が1点ずつ出土したが、落ち込みは確認されなかった。No.5～7グリットは深さ80cm前後で、No.8～12同様に「味噌土」に達した。No.5グリットより陶器片が2点出土した外は、出土遺物がなく遺構も確認されなかった。No.1グリット～4グリットにかけては深く、No.4が深さ1m20cm、No.3が深さ1m30cm、No.1・2はともに深さ1m40cmを測り、調査2区においては、東側が高く西側が急激に低くなっていると考えられる。調査2区の南側にある基地から北へ突き出た狭い台地となっていることが確認できた。No.4グリットからは黒曜石片が3点、縄文土器が3点、内耳土器片が1点出土した。No.3グリットからは内耳土器片が3点、縄文土器片が6点出土した。

調査2区の出土遺物のうち、No.5・8・12グリットの遺物は表土(耕作土)中から出土し、No.3・4グリットの遺物は、第II層暗褐色土中から出土した。

この調査により、従来から縄文時代の遺跡として知られていたが、調査1・2区の出土遺物量と遺構の未確認から考えると、縄文時代から鎌倉・室町・南北朝にかけての遺物を包蔵する地域ではあるが、集落構造をもつ遺跡とは考えにくい。本遺跡は、「遺物包蔵地」であり、遺構を伴わない遺跡として位置づけられる。

## 第2節 遺構(第6・7図 図版1～3・5)

当遺跡において、直接、遺跡を性格づける遺構は発掘されなかった。

第6図の層位断面図と第7図の礫群実測図を参照されれば理解できるように、下間川の氾濫原であったと考えられる地層及び礫の遺存が確認された。

また、前節で記述したように、調査2区では基盤に「味噌土」が堆積し、若干の遺物は検出されたが遺構の存在は確認できなかった。

### 第3節 遺物（第8～10図 図版4・6）

出土遺物は、調査1区・2区ともに少ない。

調査1区では、第8図・第9図に見られるものがすべてである。図中において、アルファベットは、出土グリット名であり、算用数字は整理番号である。

Aグリットからは、2点の遺物が出土した。A-1は、すり鉢の胴部破片で、推定胴径35cm前後である。内外ともに黒褐色を呈す鉄釉が施されており、調整はナデ整形である。胎土は白く、目は荒くつけられている。A-2は、蓋の破片で、口径7.2cm、外径10.6cmを測る。 $\frac{1}{2}$ 個体が残存し蓋上面のみに淡茶褐色の釉が施されている。胎土は白く、ち密で、調整は内外ともにナデ整形で内側に沈線が入っている。1・2ともに時代は、室町時代以降と考えられる。

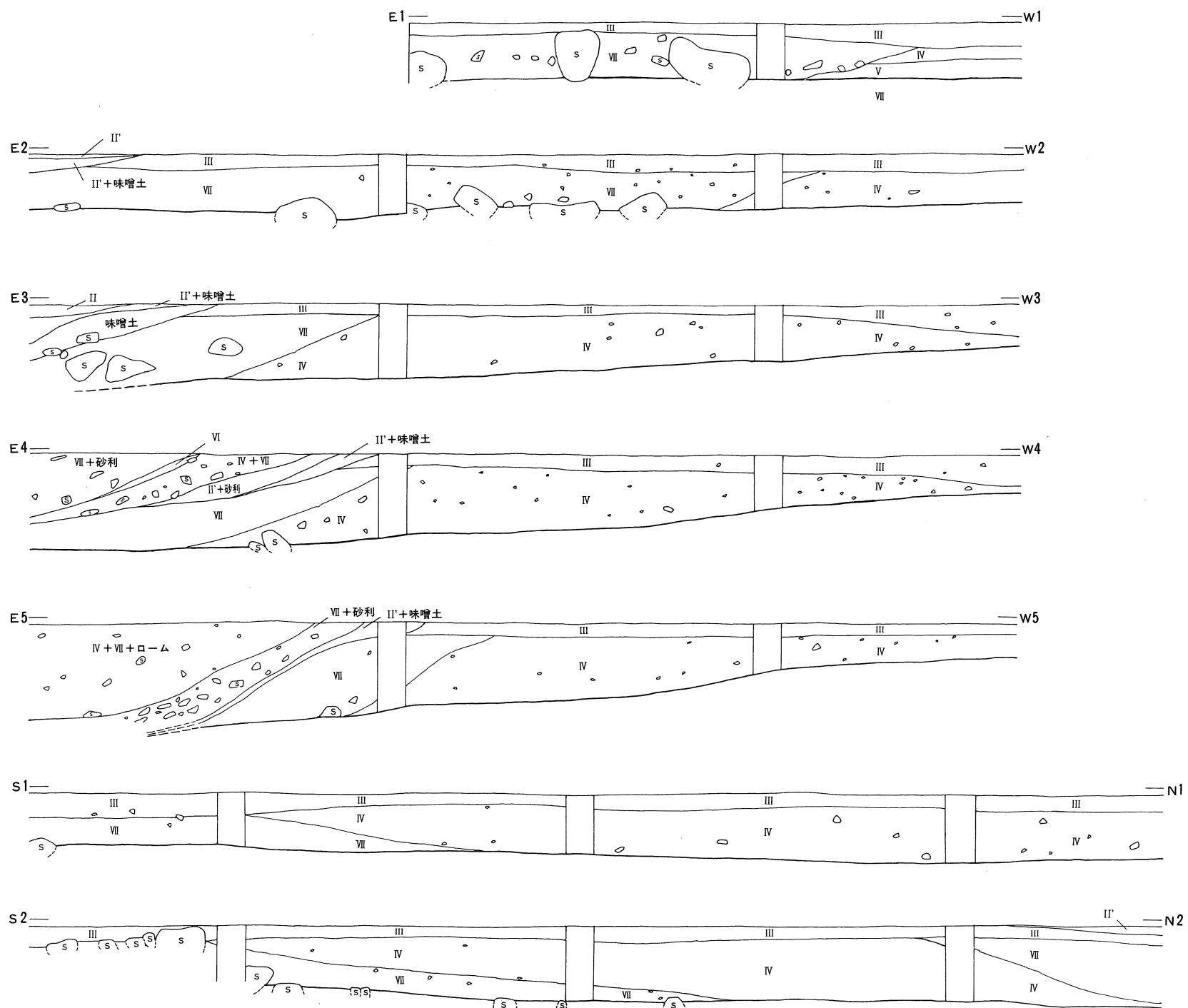
Cグリットからは、4点の遺物が出土した。C-1は、黒曜石剝片で使用痕はない。C-2・3は、同一個体の内耳土器胴部破片で、2・3ともに外面にはススが付着している。内面はともに暗褐色を呈し、胎土はこまかい長石、石英、雲母を含む。調整は、内外ともにナデている。C-4は、鉄製品であるが、原形を判別しがたい。

Dグリットからは、4点の遺物が出土した。D-1は、縄文時代後期の深鉢形土器の胴部片であり、推定胴径は17.6cmを測る。整形は、内面は横方向のあらいヘラミガキがされ、外面はナデしている。文様は8～9単位になると考えられ、無節の斜縄文の上にH字状の区画を沈線でつけ、H字状の区画以外は磨り消している。色調は淡褐色を呈し、胎土には長石・石英を多く含む。時期は掘え内式に比定される。D-2は、黒曜石剝片で、一部に使用痕が見られる。D-3は、灰釉陶器の碗の底部片である。底径は4.2cmを測る。色調は、灰白色を呈し、胎土はち密で焼成は良好である。内外ともにナデ整形で、底部は右回りの雑な糸切り底である。灰釉が一部に見られる。平安末に位置づけられる。D-4は、鉄製品であり、刃子形を呈するが、原形は判別しがたい。

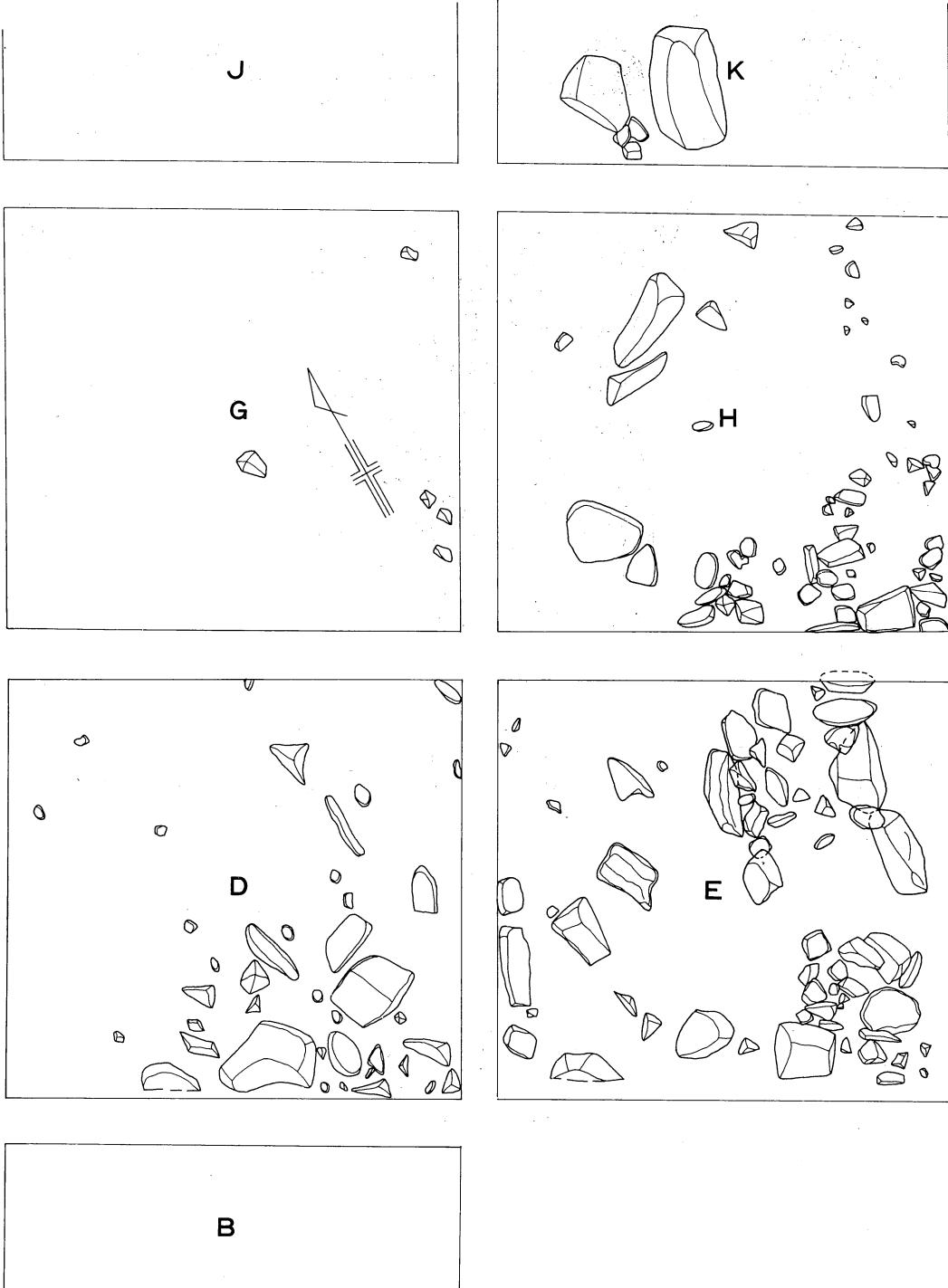
Eグリットからは、石鎌が1点のみ出土した。黒曜石製で長さ3cm、巾2cm、厚さ7mmを測り、脚をもつが三角鎌に近い形をしている。

Fグリットからは、4点の遺物が出土した。F-1は、茶碗の口縁部片で施釉陶器である。口径は、14.2cmを測り器厚は7mm前後である。釉は淡緑色を呈し、胎土はち密でこまかいが、大粒の長石片が混入している。焼成は良好で内外面ともにナデている。 $\frac{1}{2}$ 個体である。F-2は、F-1同様、施釉陶器で茶碗の胴部片である。推定胴径11cmを測り、淡緑色の釉が施され、胎土は灰白色で、ち密である。内外面ともにナデしている。 $\frac{1}{2}$ 個体である。F-3は、内耳土器胴部片で淡褐色を呈し、こまかい長石、石英、雲母を含む。図中にはないが、これと同一個体の胴部片が2点出土している。F-4は、施釉陶器浅鉢の口縁部片で、推定口径14.4cmを測る。釉は透明釉を施し、胎土は灰白色をしている。内外ともにナデしている。総じて室町時代以降のものと考えられる。

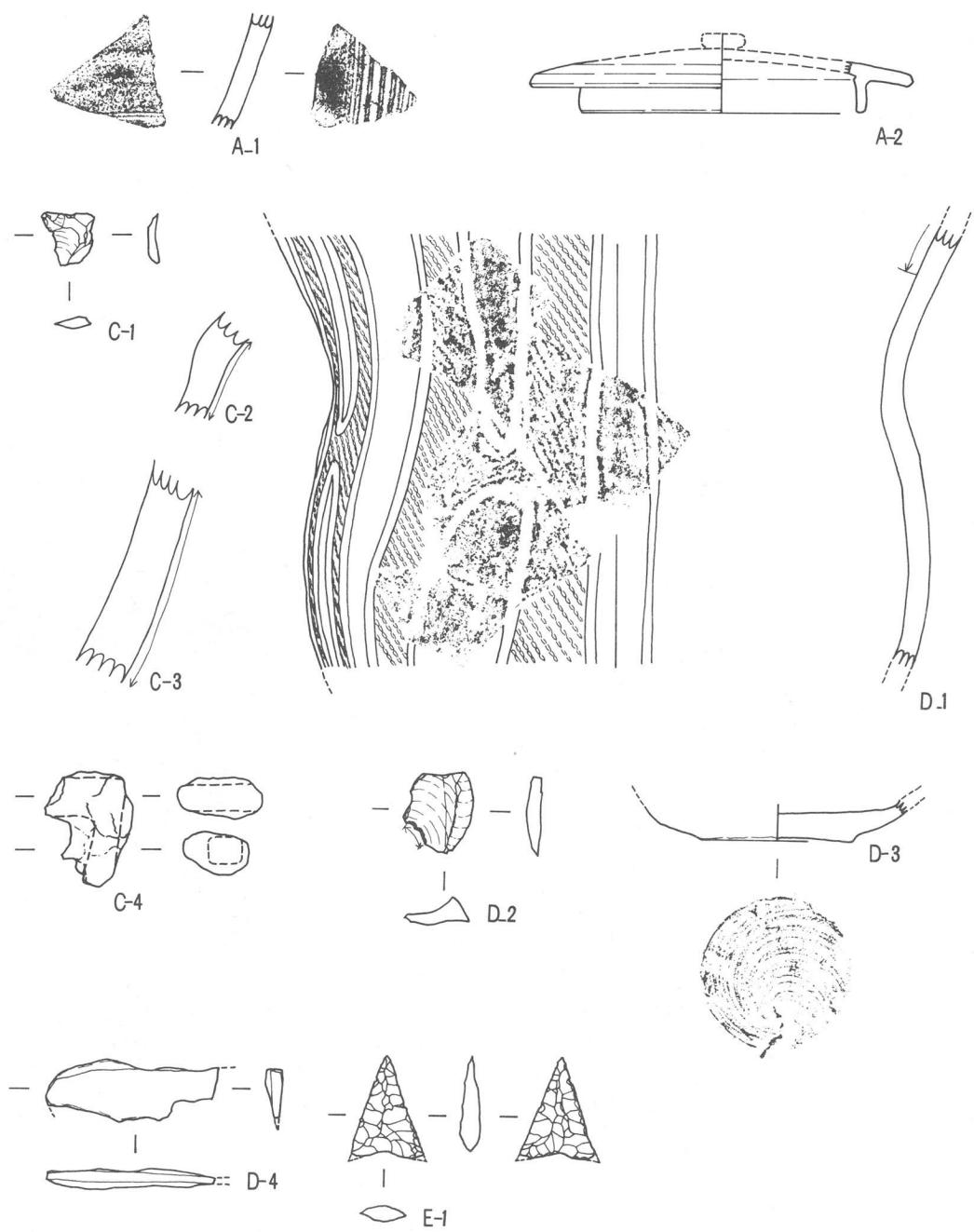
Gグリットからは、3点の遺物が出土している。G-2は、黒曜石剝片で、一部に使用痕が見



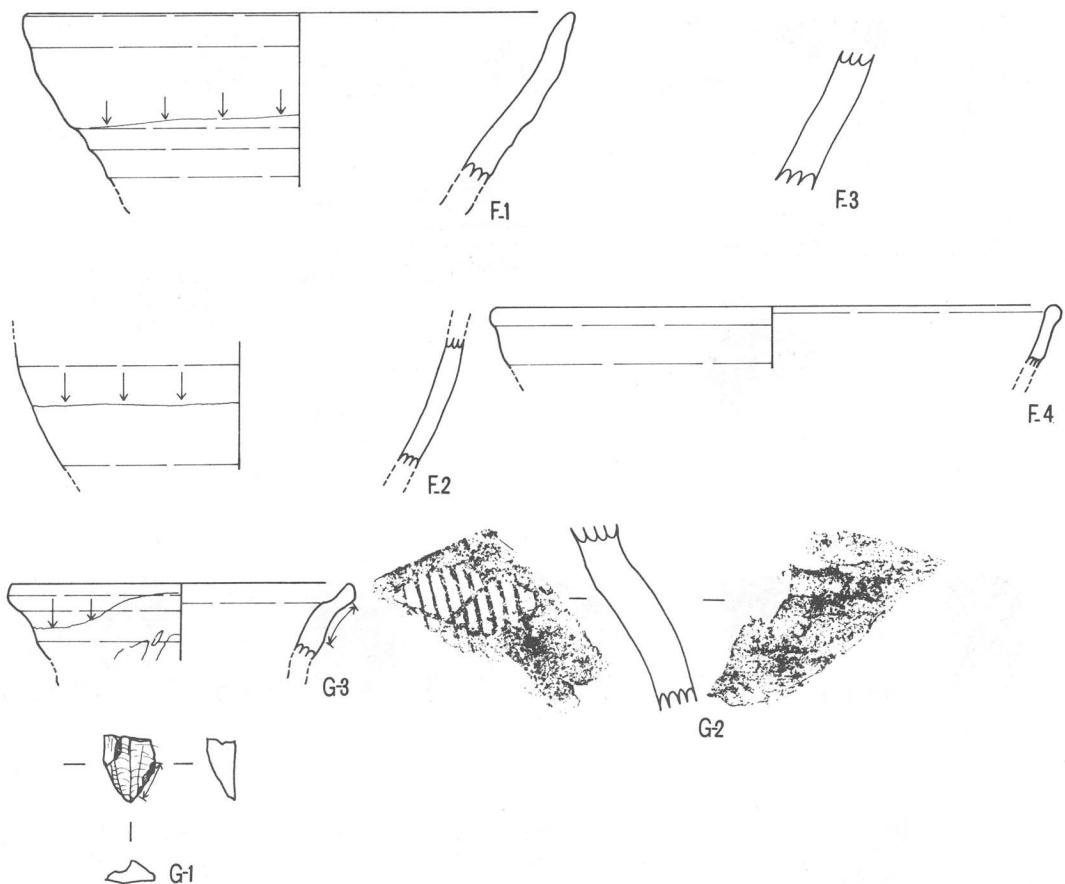
第6図 調査1区W-E 1~5, S-N 1・2層位断面図 ( $S = \frac{1}{60}$ )



第7図 碓群実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )



第8図 調査1区A・C・D・E グリット出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )

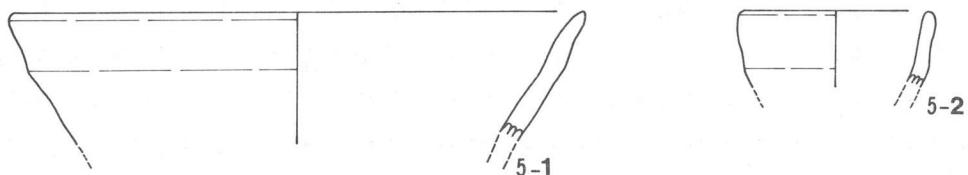
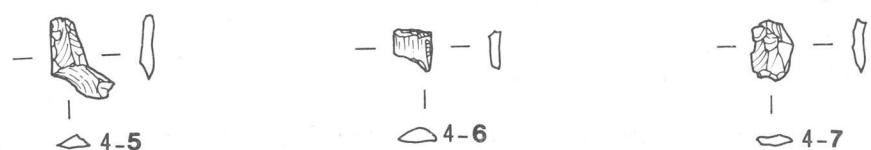
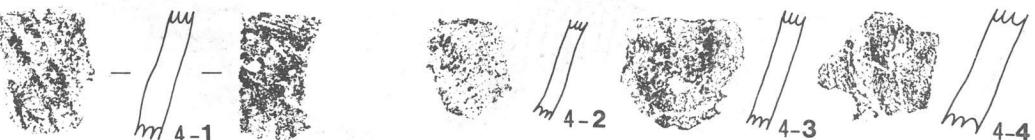
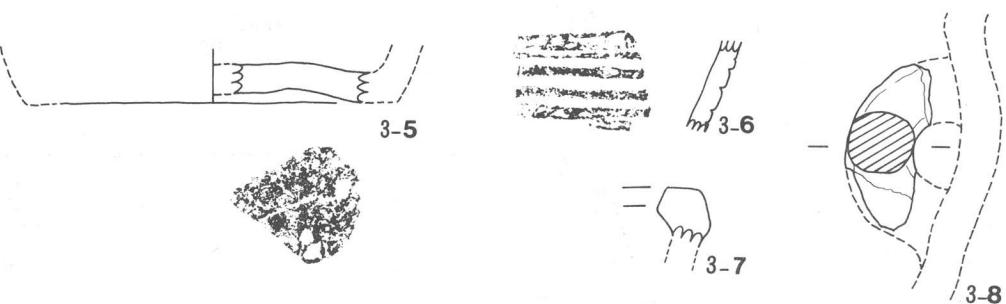


第9図 調査1区F・Gグリット出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )

られる。G-2は、須恵器雍胴部片である。色調は淡褐色を呈し、胎土は長石、石英とあらい雲母を含む。調整は外面はヘラナデの上に叩き目を施し、内面はヨコナデをしている。焼成は良好である。G-3は、灰釉陶器で、口縁部のつくりから長頸瓶か、水差と考えられるが、口縁部の径が8.8cmあることや傾きが外反しすぎている点に疑問が残る。釉は淡灰褐色を呈し、内面の方がしっかりと釉が付いている。焼成は良好である。G-2は、奈良時代末、G-3は平安時代半ばに位置づけられる。

調査2区では、3-5・8・12グリットから遺物が出土したが、数は少ない。第10図参照。

No.3グリットからは、8点の遺物が出土した。3-1は、縄文時代中期の土器の口縁部片である。内外ともにヘラミガキで、淡褐色を呈し胎土はあらい長石、石英を含む。焼成は良好。3-2~4は、縄文時代前期の土器と考えられる。3-2は、胴部片で径はあまり大きくななく、器厚は5mmでこまかい雲母と長石を含む。内外ともにナデている。3-3は、小形の鉢の胴部片と考えられ、器厚は4mmで長石、石英を多く含む。内外ともにナデしている。内面には炭化物が付着している。3-2は暗褐色、3-3は灰褐色を呈している。3-4は、淡褐色を呈し、器厚8mmと



第10図 調査2区3～5・8・12グリット出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )

厚い。胎土には、長石、石英、金雲母を多く含み、内面はナデているが外面は判明しがたい。3-5は、底部片で底径9.5cm前後を測る。色調は、淡褐色で砂粒多し。底部には木葉圧痕がつけられている。3-6は、灰褐色を呈し、深鉢形土器の胴部片と考えられる。胎土には、長石、砂粒を多く含み、文様は斜繩文の上に半蔵竹管により平行沈線を横にひいている。内面はナデしている。中期前葉に位置づけられる。3-7・8は、内耳土器片で、7は口縁部、8は内耳部である。7は、淡褐色を呈し、口唇部はヘラミカキをし、その外はナデしている。胎土にはこまかい黒雲母、長石、石英を含む。8は、淡茶褐色を呈し、こまかい黒雲母、長石、石英を含む。残存状態から内耳部の作り方が認められ、粘土を同心円状にかぶせて作っている。時代はともに室町時代以降と考えられる。

No.4 グリットからは、7点の遺物が出土した。4-1~4までは、いずれも繩文時代前期の土器である。4-1は淡褐色を呈し、胎土には長石、石英を含む。外面はナデしており、内面には細い条痕状の痕跡が見られる。2は淡褐色を呈し、胎土には長石、石英を含む。器厚は4mmを測り、外面はヘラケズリ、内面はナデしている。3、4はともに纖維を含む。3は淡褐色を呈し、胎土に長石、石英を多く含み、器厚は6mmを測る。4は外面は暗褐色、内面は淡褐色を呈し、胎土に大量の纖維と金・黒雲母、こまかい長石、石英を含む。外面は斜めのヘラケズリ、内面はナデしている、器厚は9mmを測る。4-5~7は、黒曜石剥片で、使用痕はない。

No.5 グリットからは、2点の遺物が出土した。5-1は、施釉陶器で茶碗の口縁部片である。口径は14.8cmを測る。釉は緑色を呈し、胎土はち密で、焼成は良好である。胎土は暗灰色を呈す。5-2は、施釉陶器で小形の碗か茶入と考えられる。釉は淡緑色を呈し、胎土はち密で白色を呈す。口径は4.8cmを測り、内外ともにナデしている。焼成は良好である。

No.8 グリットからは、施釉陶器で皿の口縁部片が1点出土。口径は10.6cmを測り、釉はほぼ透明に近く胎土はち密で暗青色をしている。焼成は良好。

No.12 グリットからは、施釉陶器で碗胴部片が1点出土。推定胴径は9.6cmを測り、釉は内外ともに茶色を呈し、胎土はち密で白色をしている。焼成は良好。

## 第 IV 章 まとめ

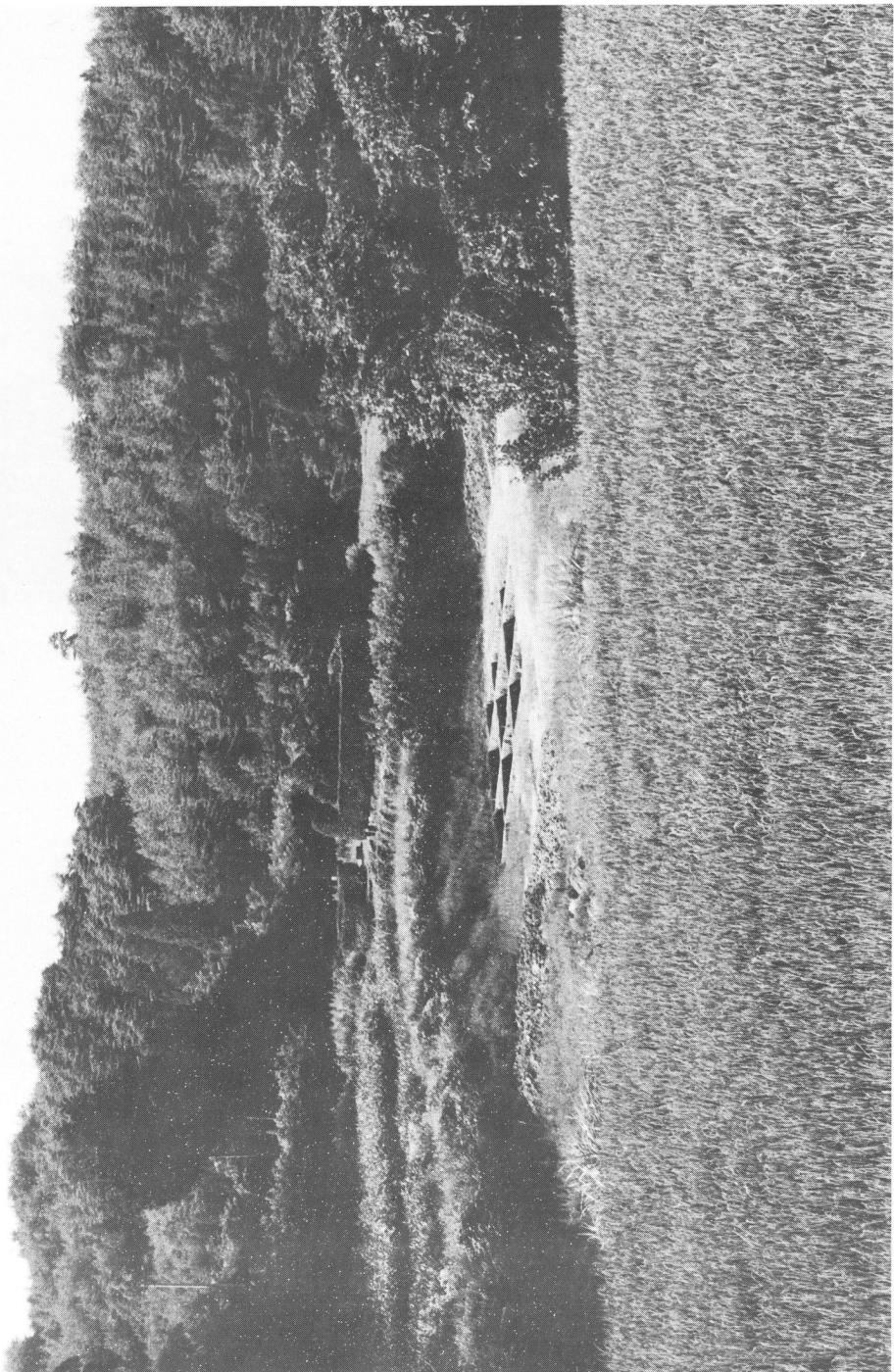
以上述べてきたように、当遺跡は調査1区が下間川の氾濫原に位置し、調査2区は山麓先端の台地に位置する。両区ともに遺物を含む層と、遺構が存在すべき層が不明確であり、遺物を含むが遺構が存在しないと考えられる遺跡と判断した。遺物は、繩文時代前期から、中期・後期、さらには奈良・平安から室町時代以降の遺物が出土していることから、この周辺に遺跡が存在する可能性が強い。特に、施釉陶器や鉄製品の出土は、中沢中割高見城と、「のろし台」と言われる陣馬形山との間の交通関係の中での集落や生産基盤の一端を意味するものと考えられる。また、繩文時代前期の土器の出土を見たことは、南方上位に位置する「よきとぎ」遺跡との関係を裏付けるものである。極めて概略的であるが、当調査のまとめとしたい。



# 図 版

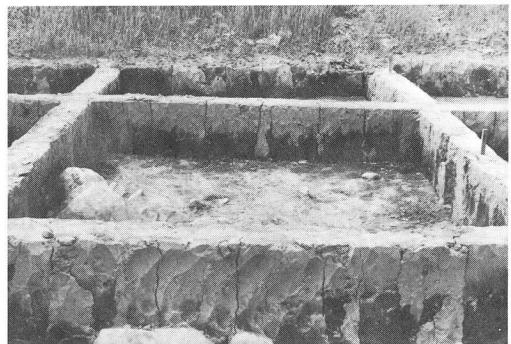


図版 1 遺跡遠景





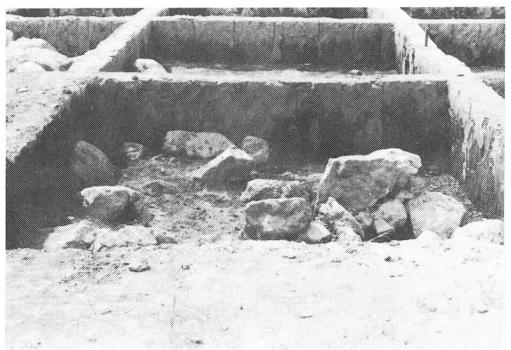
A グリット



C(上)・D(下)グリット

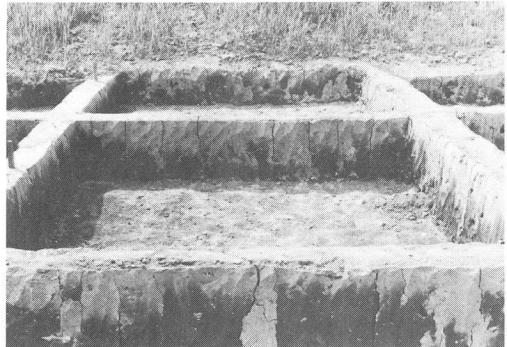


B グリット

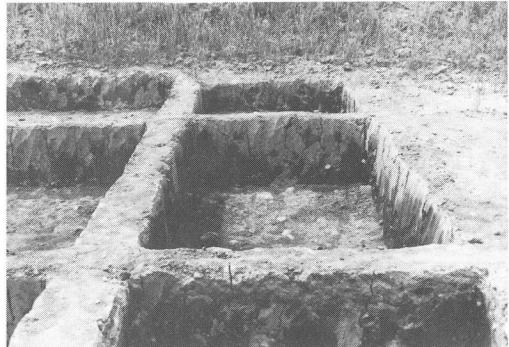


D(上)・F(下)グリット

図版 2 調査1区A～E グリット



F(上)・G(下)グリット



I(上)・J(下)グリット

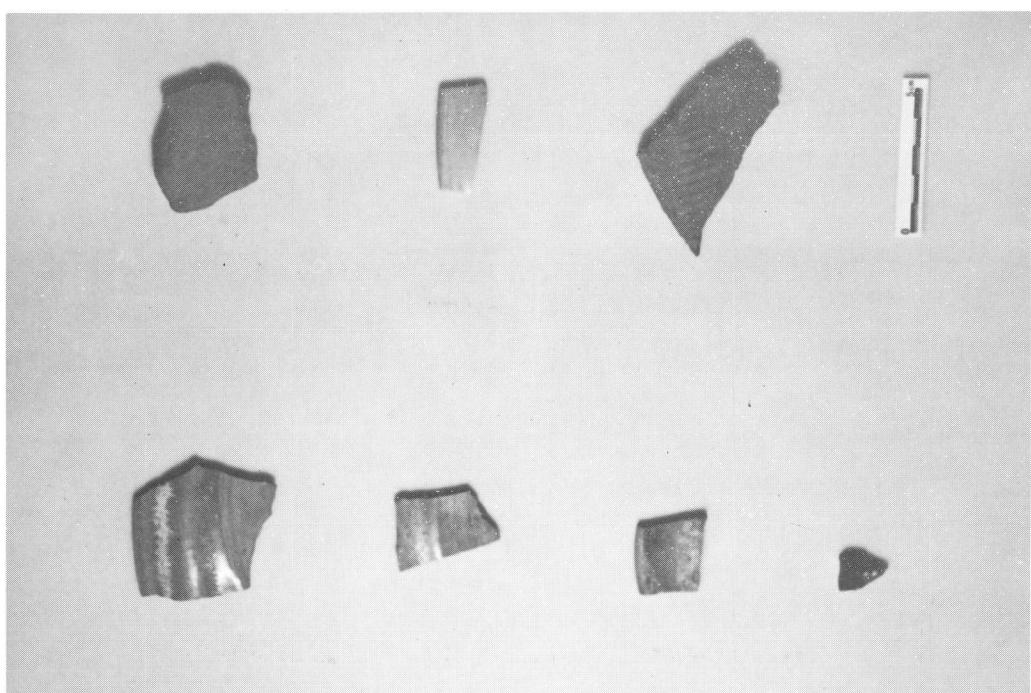
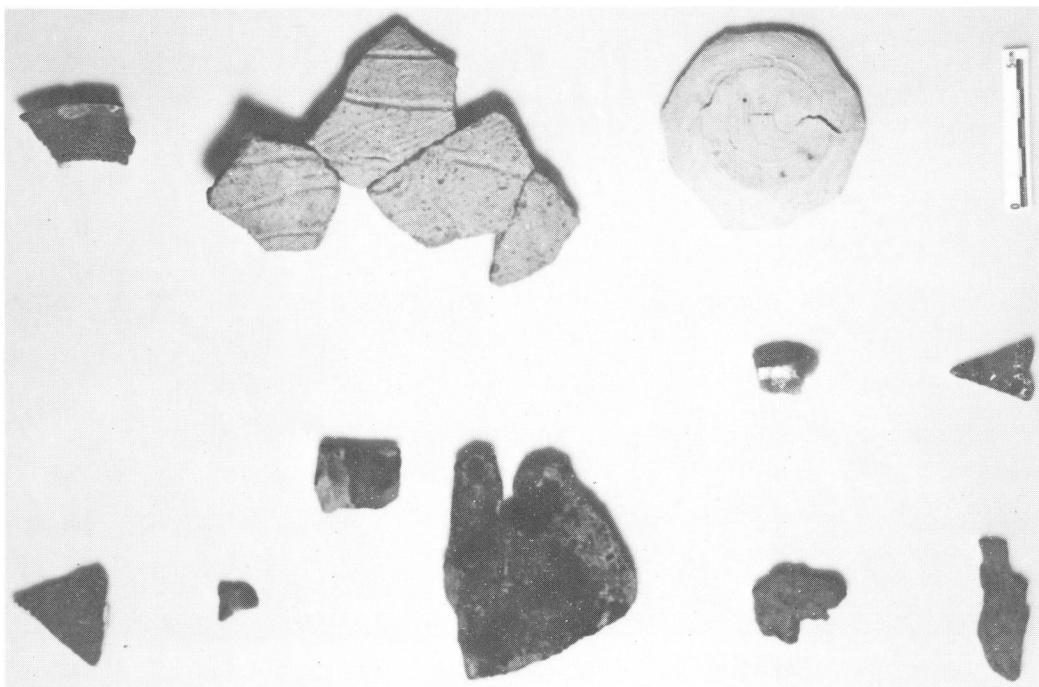


G(上)・H(下)グリット

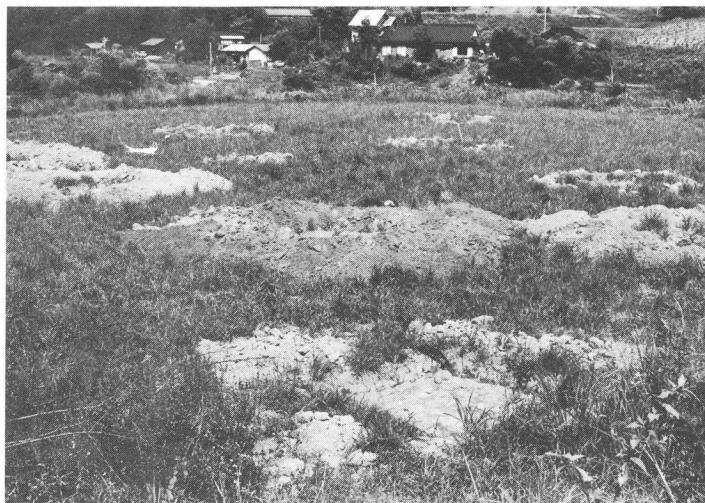


J(上)・K(下)グリット

図版 3 調査1区F～Kグリット



図版 4 調査1区A・C・D・E（上段）F・G（下段）グリット出土遺物



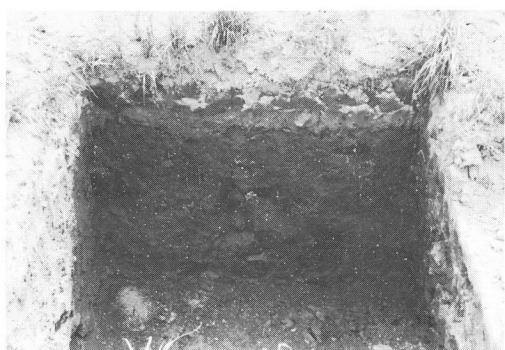
調査 2 区近景



No. 1 グリット



No. 2 グリット

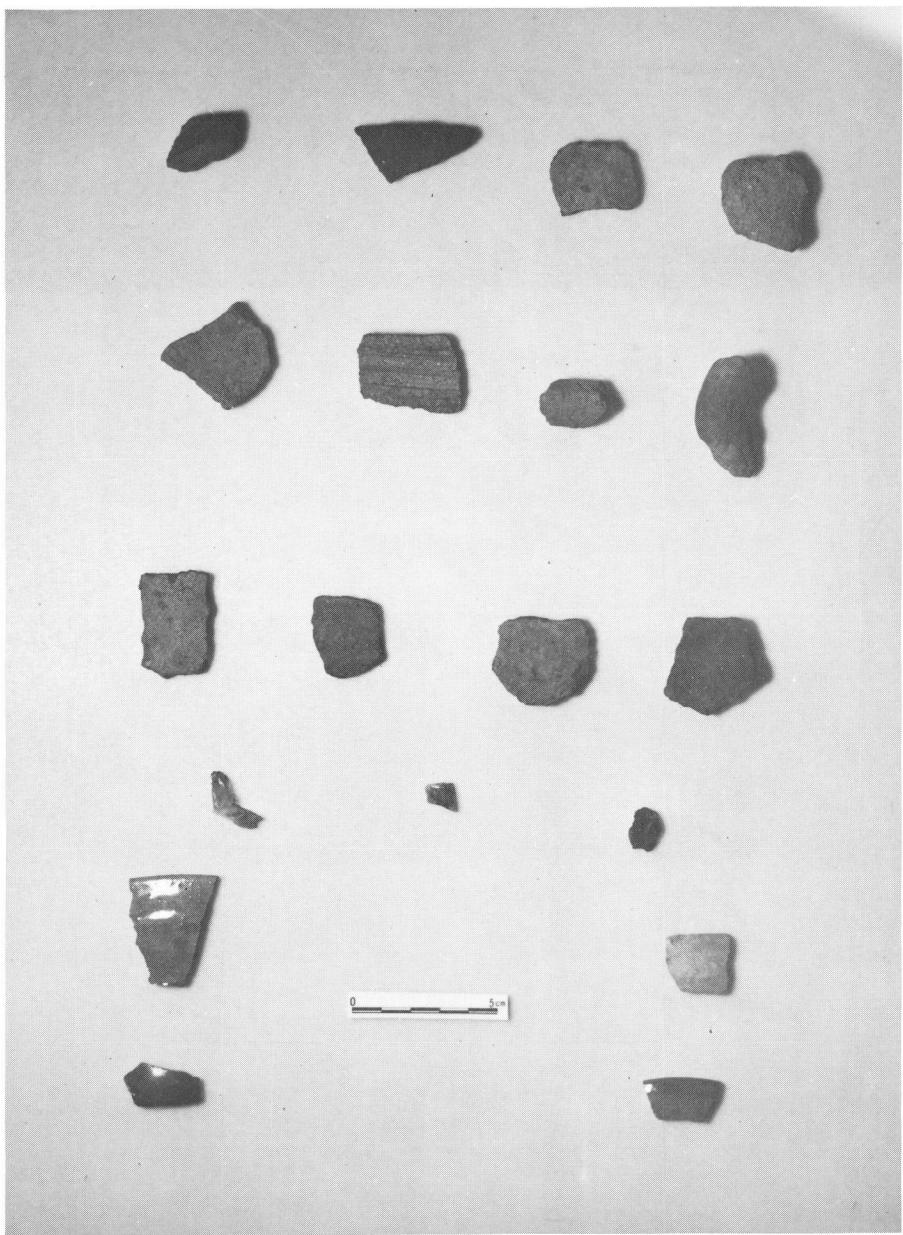


No. 4 グリット



No. 11 グリット

図版 5 調査 2 区近景及びグリット (No. 1・2・4・11)



図版 6 調査2区No.3～5・8・12グリット出土遺物

## 古宮遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月25日 発行

編集 駒ヶ根市上穂南2-15市立駒ヶ根博物館内

県営ほ場整備事業駒ヶ根下間地区

埋蔵文化財調査会

発行 伊那市青木町伊那合同庁舎内

南信土地改良事務所

駒ヶ根市赤須町20-1

駒ヶ根市教育委員会

印刷 伊那市みすず

小松総合印刷株式会社